

潮香る『パルバ』の港街は、独特な街並みをしていた。

まず、建物に統一感がない。カラフルなレンガ造りの家もあれば、歴史を感じさせる土蔵造りの店もある。とって雑然としているわけでもなく、それらが景色として絶妙な案配でうまくまとまっている。次に、一本一本の道が広い。往来もよく整備されている。交易で栄えた様々な文化と、水陸交通の拠点としての実用性が、この街を形作っていた。

市場から五分ほど。一行は、大通りの中にある路地に入る。

少し行ってすぐにある『海幸食堂』という看板のかかった二階建ての店の戸を開いた。

「いらっしゃい。あら、可愛らしいお客さんだこと」

カウンターの中にいる、恰幅のいい、パーマの中年女性が明るく言って、

「こんなところで観光かい？ もの珍しいねえ」

「いや、実は情報を集めていて」

ノアが難破船に乗って漂着した可能性があること、記憶喪失であること、そして港での漁師への聞き込みについて、ネックが粗方の説明をすると、女性は「なるほどねえ」と言いながらカウンターから出てエプロンで両手を拭き、水の入ったグラスをテーブルに並べた。「自己紹介が遅くなったけど、私はムーサってんだ。記憶がないだなんて、かわいそうにねえ」

ムーサの視線を受けたノアは、恐縮してお辞儀をした。

「何か知らないかな」

ネックが言うと、ムーサは「ああ」と頷いて、

「あんたらの言ってる難破のことか分からないけどね。……ひとつ、気になることがあって」

「気になること？」

「そう。実は最近、うちの食堂の二階を間借りしてた人が、数日前に街を出ちゃったのよ」

四人は思わず顔を見合わせる。

ネックが代表して、

「それがどうしたんだ？」

「いやね、ずっとツケてた家賃を払わないまま夜逃げするようになくなってさあ。——まあ、そりゃもう仕方ないんだけども」

ムーサは腰に手を当て、

「その人、もう十年くらいここで貨物を運搬してる船長でね、その船長が妙な書置きだけ残して消えたのよ」

「なんだそりゃ？」

ノランが訊くと、ムーサは急に声を潜めて、

「それがね。いなくなる数日前の夜……船長、大ケガをしたの」

「大ケガ？」

「そう。それはもうひどいケガよ。逃げ込むように帰って来たその人を見て、本当にびっくりしたわ。腕は折れてるし、顔はボコボコだったし……」

その時の船長なる人物の様子を思い描いたのか、ムーサはうつむいて身震いをした。

「すぐに医者呼んで処置してもらったから、一命は取り留めたんだけどね。……そして、その船長。どうしてケガをしたのか、いくら理由を尋ねても答えなかったのよ。ぶるぶる震えるばかりで」

「……」

「きっと思い出すのも嫌なくらい、何か恐ろしい目に遭ったんでしょいうね。そういうことがあったから、街を出て……」

ムーサは改めて一行に向き直り、

「——で、結局あんたらに何が伝えたいのかっていうとね。その船長が大ケガをして帰ってきた日から、船長の船が、まるっと消えちゃってたのよ」

「船が消えたあ？」

ノランの反芻にムーサは頷き、

「そう。船長は『売った』の一点張りだったんだけど、船乗りにとって命である船をそう簡単に売るはずないでしょう？ おかしいわよね」

「確かに……」

「……ここだけの話さあ。もしかしたら船長、誰かに襲われて、船を奪われたんじゃないかしら？ で、あんたらの言う難破した船っていうのは、その襲撃犯が乗ってた船で……」

「——なるほど」

ムーサの話のを元に考えれば、筋が通る。

漁師たちが難破を知らなかったのは、その船が「盗まれた状態」で、秘密裏に出航したから。しかしその時点でこの街に船長がいて、本人が「売った」と言う限り、その事実が明るみになることはない。売られた船がどこに行こうが、他の人間には関係ない。

難破というのは、その船と持ち主が帰港しないからこそ知れるのだ。

ここまでの推測が正しいとすると、ノアは秘密裏に出航したその船に乗っていた。

そして、その船が何らかの理由で転覆し、海流に乗って『アリーベ』に流れ着いた。

では——どのような事情で、ノアはその船に乗っていたのだろうか？

強奪した船に乗り、誰にも見られず、海に出なければならぬ訳。

その船が出た後に、海が荒れだした理由——。

——わからない。

「……船長がどこに行ったか、足取りはわかりますか？」

「いいえ。書置きには行先がなかったわ」

リアムは落胆気味に「そうですか……」と呟いた。

ネックは嫌な予感がした。

このままでは面倒ごとにズルズルと巻き込まれるのではないかと。本来の目的であるノアの記憶を取り戻すことから逸れるようなことだけは避けたい。その場をやり過ぎすべく、会話を適当に終わらせるのもありかと思っただが、ノアが眉を八の字にさせている。

「船長さん、どうしたんだろうね」

ここで匙を投げたら悲しむ人が少なくとも二人。

ネックはすぐに思考を巡らせ、

「……ちょっとお願いが」

「なんだい？」

「船長が住んでた部屋、見せてもらうことってできる？」

「いいよ。そこの階段から二階に上がって、突き当たりを右さ」

ムーサは店の奥を指した。

「あの人、何も持たずに出てっちゃったから。手つかずになってるよ」

ノアが不安げに見つめているのでネックは

「二人はここで待っててくれ」と告げノランと階段を上った。